

Project brief 2

プロジェクト紹介【寄稿】

長崎港国際観光船ふ頭「緑地」

太田啓介

OHTA Keisuke

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
社会環境事業部
事業統括リーダー補佐



秋田裕子

AKITA Yuko

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
社会環境事業部
技師



はじめに

長崎港は、横浜港や神戸港で困難な観光船ふ頭への15万総トン級クルーズ客船の接岸が可能であり、上海から約800kmと、イーストアジアクルーズで優位な立地条件を有する。

特に、松が枝ふ頭は外国籍観光船寄港実績が日本一であり「みなとまつり」「ペーロン大会」などのイベントの場所としても利用されているウォーターフロントである。また、長崎市街中心部に位置し、背後は大浦天主堂やグラバー園等の観光名所や、世界遺産の暫定リスト入りした「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が立地し、歴史的な景観が広がる。さらに、対岸に市民の心のよりどころである稲佐山が美しく見え、水と緑にあふれた「長崎水辺の森公園」にも近接する。(図1)

長崎港松が枝国際ターミナルビル(以下、ターミナルビル)は、「国際観光文化都市・長崎」の再生事業の一環として、国際ゲートウェイ機能の強化を目的に整備が行われ2010年3月にオープンした。また、緑地の一部も供用が開始され、港の景観を楽しめる新たな観光スポットとして注目が集まってい

る。(写真1)

当社は、当該事業のうち、緑地設計と現場デザイン監理及び観光船の乗客を迎えるギャラリー設計を担当した。(図2)

本稿では、緑地を中心に、計画内容とそのプロセスについて報告するものである。

表1 関係組織等

事業主体	長崎県港湾課
ランドスケープデザイン	オリエンタルコンサルタンツ
アドバイザー	上山良子
建築設計	InterMedia 一級建築士事務所 + NKSアーキテクト
環長崎港地域アーバンデザイン専門家会議	座長 伊藤滋 / 副座長 篠原修
アドバイザー	上山良子・石井幹子・林一馬

デザインコンセプト

長崎港は他に類を見ない魅力溢れるユニークな歴史を持ち、港



図1 位置図



写真1 平成21年度完成の長崎港国際観光船ふ頭「緑地」

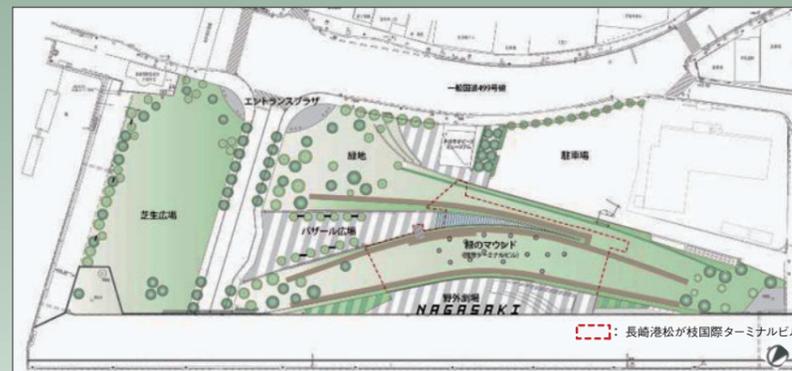


図2 平面図(完成時)

周辺の景観にも優れ、国際観光港として高い評価を得ている。その中でも港湾施設として重要な位置付けである松が枝地区は、歴史的景観に恵まれた周辺環境と調和した高質なデザインが求められる。こうした要請に対応するため、国内外の観光船が寄港する海の玄関口として観光県長崎に相応しく、また市民に愛される、個性的で後世に誇れる景観を創出するため、「ハレとケの共存する緑の劇場空間」をデザインコンセプトとした。

ここで言う「ハレ」とは「晴れの日」のハレで、観光船が来た時を示し、「ケ」とは観光船が来ていない日常の時を示す。つまり、ハレの時は観光客を歓待する劇場空間として県民が観光船を見て楽しむ場となり、ケの時は港を楽しむ快適な劇場空間として考えるものである。

デザインの展開(図3)

・ 歓待のランドスケープ
観光船を歓迎する緩やかでダイ

ナミックな円弧とスムーズな動線や、ヒューマンスケールの劇場空間を緩やかに包み込んだランドスケープがターミナルビルと融合し、敷地全体に広がる「大地のアート」を創生する。

・ 周辺のコンテキストの引き込み
長崎での位置付けや周辺のコンテキスト(文脈:歴史・文化、資源)を引き込み、臨港道路や舗装パターン、野外劇場の視点場による稲佐山、ロビーからの長崎港、そして緑のマウンドからの女神大橋へのそれぞれの眺望により、当該地区のポテンシャルを最大限に引き出す。

・ 来訪者を誘う空間構成
左右対称のエントランスプラザや並木の臨港道路、マウンドから続くウッドデッキなど、来訪者が一見してわかり易く、公園やターミナルビルへ誘い込むような解放的で見通しの良い明快な空間を構成する。

・ 四季を彩る豊かな植栽
四季を通じて楽しむことの出来

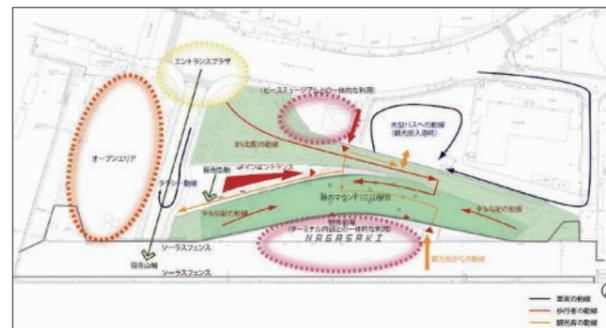


図3 デザインコンセプト図

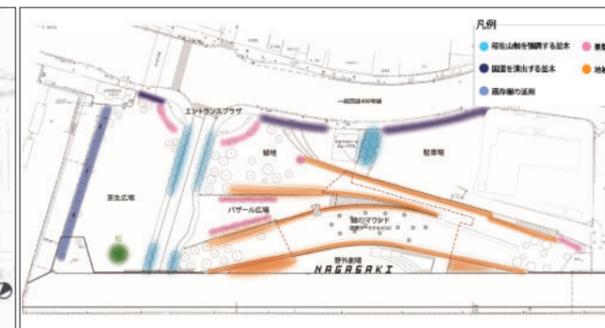


図4 植栽ゾーニング図

る植栽計画により、常に表情豊かな緑地とする。

・ 賑わいのある夜間景観の演出
夜間でも人々が集い賑わう港や、活気あるまちづくりのため、緑地の特徴を活かした照明により夜間の魅力を演出する。

ランドスケープデザイン

・ 植栽(樹種)
港湾緑地であることから、タブノキをはじめとする耐潮性の強い樹種を選定した。また、景観木として、長崎市の木に指定されているナンキンハゼを景観上重要な箇所採用している。

・ 植栽(配置)(図4)
外周は中高木の常緑樹を配置して緑の骨格を形成し、岸壁側は耐潮性の高い常緑樹を配置して防潮効果を期待している。臨港道路と国道側ターミナルビル出入口部は、常緑樹の並木として、稲佐山軸をより強調し、海やターミナルビルへの誘因を図った。(写真2) 擁壁の天端には下垂する地被



写真2 稲佐山軸を強調する並木



写真3 擁壁(現場打ち区間)



写真4 天然石舗装



写真5 竣工時の夜間景観

類を配置することで、コンクリートの露出面積を減らし、堅い印象を和らげている。

・擁壁

最も規模の大きい構造物が緑のマウンドの土留め擁壁である。擁壁はターミナルビル延長上に出現し、ランドスケープと建築の一体的な空間を創出する。

構造はコンクリートで、建築の外壁と連続するラインは自由度のある現場打ち擁壁とし、外部からは見えない2重壁となる箇所は施工性からプレキャスト擁壁を採用した。また、現場打ち擁壁の意匠については、建築の外壁と連続した杉板型枠の段壁とし、圧迫感を軽減するとともに、やわらかな印象をつくり出した。(写真3)

・舗装・付属物

長崎では、眼鏡橋やオランダ坂に代表される市内の公共施設では舗装材等に天然石が用いられている。そこで、本事業でも舗装やベンチ等の付属物には天然石を採用し、地域文化を継承するとともに、周囲との連続性を確保した。(写真4)

・照明

緑地照明は緑地地形や樹木を活かし、公園全体が立体的に浮かび上がる演出とした。主要な照明器具は省電力・長寿命が期待できるLED電球を主体として、暖かい印象となるような色合いとし、生態系や環境負荷低減に配慮している。また、地中埋設や手摺り内蔵

照明等を採用し、昼間もすっきりとした景観になっている。(写真5)

環長崎港地域アーバンデザインシステム

本プロジェクトは「環長崎港地域アーバンデザインシステム」の対象であった。これは、美しい都市景観を創造し、後世に引き継ぐ財産とするために長崎県が構築した独自のシステムである。長崎港周辺における公共物のデザインの調和が重要であるとの認識のもと、個々のデザインを決定するものである。(図5)

このシステムは主に長崎港周辺で実施される県主体の開発事業を対象とするもので、アーバンデザイン専門家とのデザイン協議、委員会への諮問によりデザインを決定する仕組みである。

緑地のデザインについては、アーバンデザイン専門家の上山良子委員(長岡造形大学学長)にアドバイスを頂きながら決定していった。また、年に2~3回行われる「環長崎港地域アーバンデザイン専門家会議」にも諮り、各専門家から意見を頂きながら、デザインを進めた。

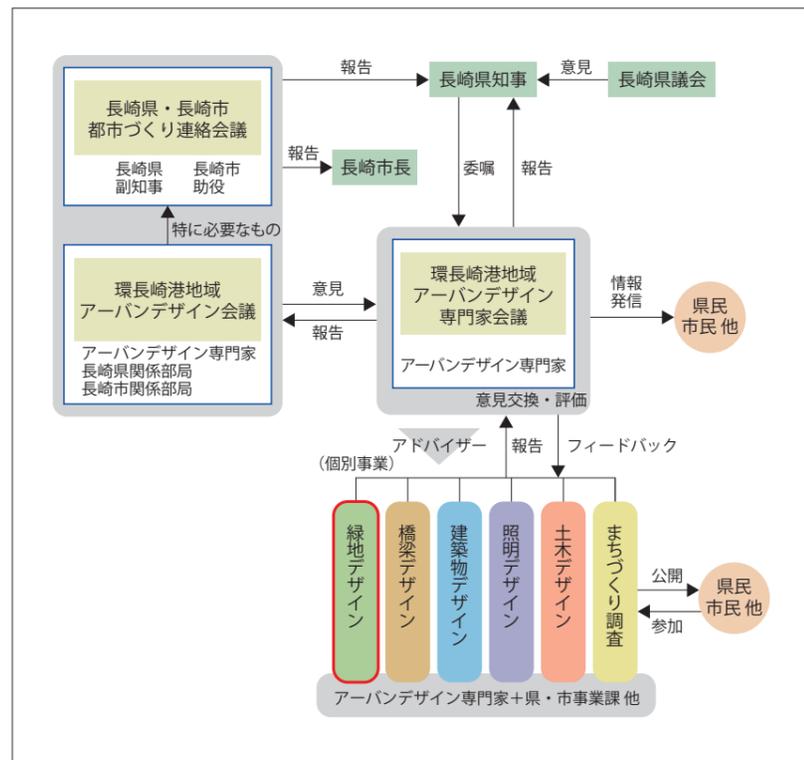


図5 「環長崎港地域アーバンデザインシステム」概要図



写真6 現場でのモックアップ確認状況



写真7 工場検査の様子

設計から現場デザイン監理までの一貫性

長崎港松が枝ふ頭の緑地基本設計・緑地詳細設計終了後、工事は2カ年に分かれ、現場デザイン監理を当社が担当した。緑地の計画・設計から現場デザイン監理までを一貫して行うことにより、当初立案したデザインコンセプトを発注者やアドバイザー、建築関係者、施工者と協働・調整しながら、丁寧に実現することができた。(図6)

プロジェクトの過程ではターミナルビルと一体となったランドスケープを実現するため、ターミナルビルの建築設計会社との連携が必須であった。緑地とターミナルビルのデザインが一貫性を保つように、基本設計段階から、合同会議や情報共有など建築設計との協働を行い、デザインの調整などを行った。現場デザイン監理では、樹木や材料の現場検収や工場検査等を実施することで、成果物の質の担保を図った。

工事が急ピッチに進むオープン前の3か月間は、当社の担当が現

場に常駐して施工者への指示・調整を行った。

・モックアップやサンプルの確認

コンクリートや石材、木材など、使用する材料については、施工者にモックアップ(実物大模型)やサンプルを製作してもらい、主要なものについてはアドバイザーも含めた関係者全員で仕上げまで詳細にわたって確認を行い、決定していった。(写真6)

現場打ち擁壁、石階段、スリット側溝、転落防止柵等はモックアップにて確認し、舗装材、ベンチ材、照明器具等はサンプルにて確認した。

・樹木検収・工場検査実施

樹木は生産場に行き、樹形や規格を確認して選定・採用した。(写真8)

また、転落防止柵と門扉等の製作物は、質の精度を高めるために、納品前に塗装工場で検査を行い、細部の仕上がりについて確認・修正指示を行っている。(写真7)



写真8 樹木検収の様子

おわりに

2010年3月26日のオープン以来、9月末までにすでに観光船が30隻以上寄港しており、海フェスタや音楽祭をはじめとした大きなイベントから、野外劇場やホールを利用したミニコンサートまで多彩なイベントが開催されている。地元のメディアでもたびたび報道され、新しい長崎の顔として、また徐々に市民の日常の公園として認知され始めている。(写真9,10)

2011年3月末には、残りの緑地も整備が完了し、全面供用される予定である。



写真9 完成した野外劇場



写真10 完成した緑のマウンド

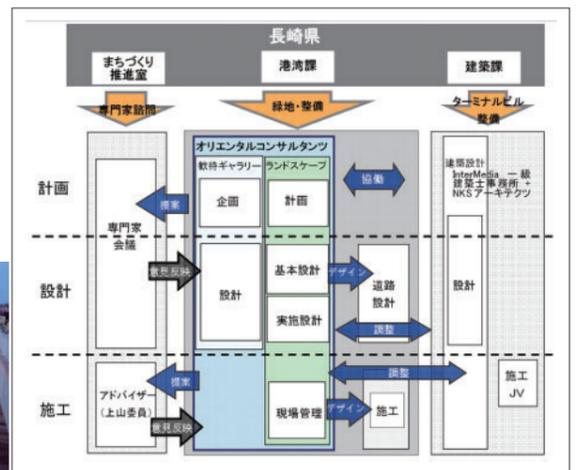


図6 プロジェクト体制図